●〈症例〉

粘膜下腫瘍の形態を示し、 同一病巣内にカルチノイドと 腺癌とが混在した直腸腫瘍の1例

堀内 亮郎¹⁾ 藤木 和彦 荒木 昭博 大野 玲²⁾
八重樫寛治 鈴木 伸治³⁾ 桜沢 俊秋 石井賢一
下井 謙吾 本田 公男 有明浩一郎 榎本靖子
遠藤 滋 佐崎なほ子 高清水一善 大草敏史

¹⁾草加市立病院胃腸科, ²⁾草加市立病院外科, ³⁾東京医科歯科大学
医学部第1内科

[Key Words] カルチノイド, 腺癌, 直腸粘膜下腫瘍

はじめに

今回われわれは、粘膜下腫瘍の形態を示し、同一病巣内にカルチノイドと腺癌とが混在した直腸腫瘍の1例を経験したので報告する。

症例：67歳、男性。

96年3月大腸内視鏡検査にて、結腸に5個の腺腫およびRaに径8mm黄白色の粘膜下腫瘍(Color 1)を認め、内視鏡的粘膜切除術目的で当科入院となった。入院時身体所見では異常所見は認めなかった。入院時検査成績では検尿、血算、凝固系、生化学、腫瘍マーカーは正常範囲内であった。

入院後経過：Raの粘膜下腫瘍近傍に生理食塩水を局注し、lifting signを確認した後、把持鉗子で病変を持ち上げながらスネアで絞約切除した。合併症なく終了し、翌日退院となった。

内視鏡的粘膜切除を行った病変の低倍率のHE染色標本(Fig. 1)を示す。リボン状・索状配列を示すカルチノイドの部分(Fig. 2)と、拡張した構造異形を伴

う腺管を示す高分化腺癌の部分(Fig. 3)とが粘膜下に認められた。一方、粘膜内には腫瘍性病変は認められなかった。

PAS-Alcian blue 染色(Color 2)では、腺管状の腺癌の部分にのみ粘液産生を示す陽性細胞を認めた。一方カルチノイドの部分は陰性であり、2つの異なる成分よりなることが示された。Fig. 4はカルチノイドの部分と腺癌の部分との間に両者が混在し、移行像を呈している部分があることを示す。内分泌細胞のマーカーであるchromogranin Aの免疫組織化学染色(Color 3)では、カルチノイドの部分、腺癌の部分の両方が陽性となった。同様に内分泌細胞のマーカーであるendocrine granule constituent (EGC)の免疫組織化学染色(Color 4)においても、カルチノイド、腺癌の両方が陽性を示した。またグリメリウス染色でも陽性となった。

切除断端は陰性であったが、粘膜下深層への病変の広がりをもつため、低位前方切除術を行った。EMRを行った病変に関しては残存、転移を認めなかった。腹部超音波検査、腹部CTでは前立腺肥大の他、特記

Fig. 2 Carcinoid area showed trabecular structures composed of small uniform cells (HE stain).

Fig. 1 Microscopic picture showed the structure of carcinoid and adenocarcinoma in the submucosa (HE stain).

Fig. 3 Area of the adenocarcinoma showed dilated atypical glands (HE stain).

Fig. 4 Microscopic picture showed transitional structures between the adenocarcinoma and the carcinoid components (HE stain).

すべき所見を認めなかった。術後3カ月を経過しているが、再発、転移は認めていない。

考 察

Obendorfer によって1907年に命名されたカルチノイドは、近年報告例も増加し、発生臓器別頻度は直腸が最も高い¹⁾。本例の特徴は、直腸の粘膜下腫瘍の同一病巣内にカルチノイドと腺癌とが移行部を伴って混在したことであったが、検索した範囲では本邦では本症例の以外には1例の報告²⁾をみるのみであり、かつその報告例も内分泌細胞癌と腺癌との併存例であると考えられ、直腸における同一病巣内のカルチノイドと腺癌との混在例の報告としては、本例は本邦第1例と考える。同一病巣内に内分泌細胞成分と癌細胞成分を含む、composite tumor の曾我³⁾による分類では composite A に相当する。

カルチノイド類似像と腺癌類似像の両方を有する杯細胞性カルチノイドとの異同が問題となりうるが、杯細胞性カルチノイドは内分泌細胞への分化細胞を混えた低・中分化型腺癌に分類される⁴⁾。本例ではカルチノイドと腺癌との間に移行像を認めたことから、両者には組織発生上密接な関連があると推定される。さらに、腺癌が存在するにもかかわらず粘膜内病変を認めない点や、腺癌の部分にも特殊染色で内分泌顆粒の存在を示す所見を得たことは、本症例の腺癌はカルチノイド由来のものである可能性を示唆する所見と考

えられる。カルチノイドと腺癌との移行は従来想定されておらず⁴⁾、本例はカルチノイドや腺癌の組織発生を検討する上でも興味深い症例であると考えられた。

・稿を終えるにあたりご指導、ご協力を賜りました草加市立病院病理部寺田充彦先生、東京医科歯科大学第一病理中村恭一教授に深謝いたします。また本症例の検討にあつては東京医科歯科大学消化器合同症例検討会の先生方の参加を得ました。

文 献

- 1) 曾我 淳：消化管カルチノイドの病理——(1)統計学的事項。臨床消化器内科，5：1661～1667，1990
- 2) 唐木芳昭，田沢賢次，麓 耕平：同一病巣内に高分化腺癌とカルチノイドが共存した直腸腫瘍の1例。癌の臨床，34：213～225，1988
- 3) Soga J：Histogenesis of carcinoids in relation to ordinary carcinomas. Acta Medica et Biologica，30：17～33，1982
- 4) 岩淵三哉，渡辺英伸：消化管カルチノイド腫瘍—最近の考え方—。外科，58：1305～1312，1996

A Case of Rectal Submucosal Tumor Consist of Carcinoid and Adenocarcinoma in the Same Lesion

Takao Horiuchi ¹⁾	Kazuhiko Fujiki
Akihiro Araki	Ryou Ohno ²⁾
Kanji Yaegashi	Shinji Suzuki ³⁾
Toshiaki Sakurazawa	Kenichi Ishii
Kengo Shimoi	Kimio Honda
Kouichirou Ariake	Yasuko Enomoto
Shigeru Endou	Nahoko Sazaki
Ichizen Takashimizu	Toshihumi Ohkusa

A 67-year-old man was treated with endoscopic mucosal resection for a rectal submucosal tumor which size was 8 mm in diameter. Histological findings revealed that the resected tumor had two components of carcinoid and adenocarcinoma in the submucosal tumor. These two components formed transitional structures in some area of the tumor. There were no findings of a adenocarcinoma in the mucosal layer. In immunohistochemical study, the tumor cells were positively stained by chromogranin A and endocrine granule constituent, and endocrine granules were found in both adenocarcinoma-and carcinoid-components, and the adenocarcinoma-component possibly originated from the carcinoid-component in this submucosal tumor.

¹⁾Dept of Gastroenterology, and ²⁾Dept of Surgery, Soka City Hospital. ³⁾1st Dept of Internal Medicine, Tokyo Medical and Dental University School of Medicine.

<カラーは26pに掲載>